

# I o T教材は OBに任せろ

育てる側も手探り



1面から続く

高専の教員にとってセキュリティ教育はまだ手探りの段階だ。ソフト開発などを手掛けるヘマタイト（東京・品川）の茨木隆彰代表（26、写真）は高専卒業生の視点から教材作成に挑む。

書いてあっても危険性や社会的意義までは想像しにくい。「実際の物で見えるようにしないと便利さが分からず、工学的な意義を理解できない」現役高専生の要求レベルは「基礎のプログラミングの授業の時間を、よ

ルも高い。5月末に情報危機管理コンテストで優勝した木更津高専の米村研究室のメンバーで情報工学科2年の丸山泰史さんは「基礎のプログラミングの授業の時間を、よ

最近企画・設計段階から脆弱性を作らないようにする「セキュリティ・バイ・デザイン」の概念が広がっている。茨木氏は「高専生は技術者としての自負を持ち意欲が高い。技術がどのよう

に世界を変えるのかを可視化する想像力の手助けとなれば」と話す。

（小柳優太）

り高度で実践的な学習に充てたい」と話す。3年の斎藤遼河さんは「あらゆるモノがネットにつながる『IoT』時代のものづくりを学ぶには、セキュリティ以外に機械工学や電子など専門学科に縛られない仕組みが必要だ」と注文する。

茨木氏はハッカー競技用ツールに続きIoTを学べる自動車型教材を5月に発表した。小型PCボードとカメラを搭載し遠隔で操縦できる。あらゆる部分に脆弱性を盛り込み、攻撃を受けて制御が利かなくなる際の動きが分かるようにした。

高知高専の岸本副校長から話を聞き、工学的な意義を理解しやすいように心がけて製作した。東京大学でも採用されたという。茨木氏は次に、信号機のIoT教材を開発している。